文化部低調に一石

共同で定期刊行物

理科4クラブ

日常的な発表の場を

このほど理科4クラブ（化学、物理、生物、地学の各研究部）が共同で各部の活動状況や研究内容を全校生に伝える場として、小冊子（サイエンス・ジャーナル）を創刊した。文化部低調の原因として、記念祭以外の発表の場がなかったなどと色々と議論されてきた中で、今回の理科4クラブの出版計画が一石を投じるものになるかどうか。大いに注目されるところだ。

4クラブの構想によるとサイエンス・ジャーナルは各研究部の活動の日常の発表にあてるとともに、各部の活動の活発化を目指そうとするこれまでに例のない画期的な出版計画となりそうだ。

四月十日に文化部長の司会で開かれた各部の代表者会議では、この計画の推進者で旧地学研究部幹事の大島明君（3E）が、出席者に理解と協力を促した。

大島君の考えでは、現在の文化部をとりまく沈滞したムードは今に始まったものではないだけに、手のつけようのない感もあり、もはや執行部が、あるいは代議員会がといった責任上の対策を投入しても根本的な解決は不可能になってきている。この時こそ、クラブを運営している当事者が自覚し、新しいことに可能性を求めていかなければならないのではないか。また、研究者と自称する者達が何も発表しない、部報も出さないと言っていたのではクラブ活動としての意義は、いったいどこにあるのだろうか。日常的に自分達の活動を書き残していく練習のためにも、サイエンス・ジャーナルの発行を試みてはどうだろう、ということだ。

この日の会議では、各代表者は各自の部内の意見を調整した上で後日再会することになり、四月二十四日には、初の理科クラブ合同会議が地学教室において開催され、約二十名の部員が出席し、出版計画が正式にスタートすることが決まった。

サイエンス・ジャーナルの発行は月刊とし、少ページ数のガリ版刷りの簡単なものとなる。各部より、編集スタッフとして若干名の担当者を選出し、全ての編集作業が進められる。発行日は各月の十五日と決め、発行日の前三日間は印刷・製本作業が行われる。この作業は各部の女性当番制になりそうだ。さらに、発行日の約十日前より編集会議の開始、その前の二週間程は、「部活動の建設週間」として、毎月の十五日を一つの節とした。リズムのある活動を展開していきたいというのが関係者の希望だ。しかし蓋をあけては、活動日が週に3日であったり2日であったりさまざまで互いの活動内容のものにまで意見を交わす必要性があり、4クラブが着実な歩調を維持できるかどうか、さらには、少人の日程の変動も含めて、予断は許されない。

なお、創刊号は今月十五日に発行された。サイエンス・ジャーナルの配布は一応全校を対象としているが費用の点などから五百部程度の発行部数となった。また、予算については執行部のとりはからいで、一つの文化部事業という見地から文化祭予備費等から支出されることになる。

なお、編集スタッフには次の各氏が選ばれた。

《化学》津島宏（2E）
《物理》内田真嗣（3E）
《生物》都次敬子（1E）
《地学》門脇孝子（1C）《地学》松山たかね（1H）三宅真由美（2E）

藤田治司文化部長の話

この計画は必ず成功させたい。ながい文化部不振の壁を破るものになるのではとも思う。これがきっかけとなって、他の文化部でも部報などの発表の場を作り始めたら、文化部のみならず自治会の大きな興奮のきっかけになるのではないだろうか。

◇

編集スタッフの関係者は今後のサイエンス・ジャーナルの企画やテーマについて、おおよそのプランを発表した。それによると、六月号では、各部の記念祭のテーマを紹介する。七月号では夏休み中の計画。九月号では、休暇中の活動報告と目前になった記念祭PR。十月号以降では、記念祭の反省から、例年の活動停滞期をどうのりきるかなどとなっている。

県西まず一勝

十七日に開催される対県立西宮戦恒例定期戦に先がけて、十日午後四時より、県西高グランドにおいて、両校ラグビー部の対戦が繰り広げられた。この日はまさまずの天候であったが、本校生からの心強い声援は応援団を除くと三十名程度で、そのための本校ラグビー部の悪役もう一つ。相手が県下二位の強豪ということもあって、五十七対〇という大差で敗北した。

芦高新聞
発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6の3

©MCMLXXVIII

みなさんへ！

四月より発行してきました芦高新聞は、従来とは異った印刷・編集方法をとっております。現在出版部は極度の部員不足に悩まされておりますが、その中で、手間と時間のかかる「活版印刷方式」は、新聞編集作業に重大な支障となります。

昨年度は二回の発行に終わった当紙に、各方面より激励、要望を頂り、自治会活動の興隆のため、芦高生自身のためにも、「ニュース性に富む紙面作り」「速報性を重視する」との目標をたて、少人数編集には最適の「謄写印刷方式」を試みることにいたしました。今後除々に改良を加え、写真報道の可能な活版印刷も含めて新聞発行を続けます。

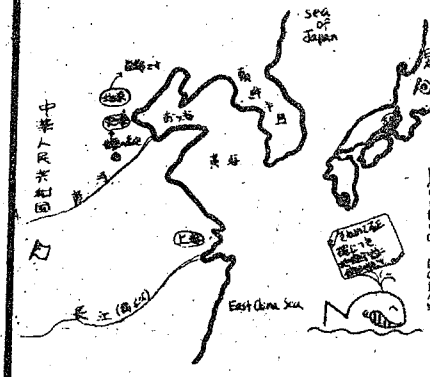
漢字独語

定期戦はもう目の前である。定期戦は学の年の執行部のしめくくりの行事である。定期戦が終われば当然のことながら選挙がやってくる。毎年この頃になるとはやり出す合い言葉は、〝三無主義〟だの、〝しらけ時代〟だの。〝自治・自由・創造〟の校風をかかげた学校に「三無主義」とはこれいかに……。自治とは、国語辞典にすると、「①自分で自分のことを処理すること。②自然におさまること。③公共団体が、みずからその行政を行なうこと（自治団体の長による）」とある。〝しらけ時代〟の学校においては②の意味がぴったりではないだろうか。つまり、〝おさまる〟ということは学内の姿勢であり、そこには、だれかがやってくれるだろう、という、暗黙のうちに築かれた約束事があるのである。それがまた、悪いことに、知らず知らずのうちに、すべての人の心の中に伝承していく。こうして、まるで人ごとのように批評している私の心にも、もう伝染しているかも知れない。そうしてこの文章が、単なる、自己批判・に終わるかも知れない〝この伝染病〟もう極限状態にあることを、全員が認識しなければならないと思うのであるが……。（文）

現代中国の学生

「学問と勤労」

インタビュー



去る四月十日より十九日まで、本校の野村雅夫先生中川義昭先生のお二方がお隣の国、中華人民共和国に「教育視察」のため訪問されました。

さてここで、先日我が出版部員が興味深々と伺った中国旅行のエッセンスというかたちでこれを紹介してみようかな。

日本に住む我々としては、知っているようで知らない国。解っているようで解っていない国というのがこの中国。日清一番身近に感じてもよさそうな国のはずだが意外と遠い存在のようだ。

――先生方の御旅行の日程は。

四月十日、大阪発上海直行のジェット機で北京に着。十一日から十三日までは北京に滞在。十四日から十六日まで天津に行き、十七日から十八日までは上海に滞在。十九日に帰国した。

――中国の第一印象は。

とにかく広いということだった。飛行機の中から見た緑でしな々く山岡に、まず感激した。山地の少ない北方を飛んだせいもあるが、山が見えなかったのも印象に残っている。

――中国大陸に踏み入ってどうだったか。

まず北京や天津から北京の街までが考えられない程整れていることに驚いた。いざ街に入ってみると、人、人、人。夜中はいったいどこで寝ているのかと不思議に思うたくらいだ。

しかしその、人の多さに対応するように国土の広さも日本とはスケールが違う。あの有名な万里の長城を見に行くとしても、よほど朝早く出発しないと、マイクロバスで片道七十キロの道のりを一日では往復できない。またこのバスが又ボンボロで、これに揺られず北京を走る車の中に日本で見るようなピカピカの車はなかった。

だが逆に言えば労働力と資源それに今は遅れこそすれ技術が加われば、想像もできぬ大きな力を中国は持つことになるだろうと直感した。

時折、テレビで写してくれる北京市内の風景が頭の中に何となくぼんやりとでくるようだ。

――現地で見聞きした中国の人々の生活はどうか。

日本人にとっては、考えられない経済的に制約された生活だったと言える。

街には大きなどうろついていない。女性は化粧などせず、皆が国民服（いうなれば国の制服）を着ている。

「皆が同じ服を着ているのなら男女と一般市民などの役割をどうやって見分けるのかしという疑問に対して、先生の話によると、ポケットの数で区別できるのだそうだ。

――中国の学生生活を見てどうだったか。

中国の学生は皆、真面目だと思う。天津を訪問した際、数々の思い出の品相の先生の中学と高校を合わせたもの）へも行ってみたが、土曜日の放課後にもかかわらず、多くの生徒がクラブ活動をやっていた。

中国の学生の一部は学校が終ると、少年宮という所へ行き勉強やスポーツに興じる。いわゆる日本の塾の様なものではなく、学生が自主的に活動し自己形成をする場所ということだ。

また大部分の学校のキャンパスには、学生のための工場が用意されている。「学問と勤労」にこれぞまさしく現代中国の学生なのだ。

楽しい話題はまだ尽きそうもないが、中国の関を通して学生に対する愛情として、ともかく、世界に目を向け、明日の日本や世界を担う若人としてあるべき道をしっかり見つめていただきたいというお話しだった。現在、日本と中国との長年の懸案となっている日中平和条約の締結も年内には大きな進展を見せてくれることだろう。その時にもう一度、近くて遠いこの国の話しを伺ってみたいという気がするのだ。

代議員長は一二年生

今年度前期の代議員会および保健委員会では、議長団、三役などをこのほど決定した。

代議員会では議長に7年C組吉岡正明君、書記には2年D組高瀬照雄君を選出した。

また保健委員会では委員長に3年H組加藤治郎君、副委員長に3年E組安藤宏君、書記には、2年C組天羽章子さん、1年C組吉川有美さんをそれぞれ選出した。同委員会では、前期の正副委員長ら3年生から選出している。

十八日に公示

昭和五十三年度選挙管理委員会（高瀬博信委員長）は十八日に、自治会役員及運動の公示を行う。第二十代執行委員会の任期も余すところ一カ月となったが、新執行委員会が無事成立するまでは、当面この両者は激動の日々を迎えることになりそうだ。

おしらせ

十七日に、定期総会場の体育館内で行われるベンチ展示会に、過去十九年間の定期誌（出版部製作）を出展します。

メガネは顔の一部です。だから....
メガネのコンサルタント
高島眼鏡店
――FOR YOUR EYES――
芦屋市大原町11―6　0797-31-3381
池田市石橋1丁目13―3　0727-62-1536
正しいメガネをかけましょう

Leica Rollei
HASSELBLAD 特約店
ハナヤ勘兵衛
阪神国道芦屋川西国道山側
☆お電話下さい→芦屋㊀3902(代)